

## 続・ウィーン断章(一)

藤 井 忠

### ——窓から見えるいくつかの影——

三月初め、ウィーンに着いた日は零下3度で、翌日は午前中に雪が降った。

黒ずんだ石の建物の間を、市電がゆっくりと進み、そのそばを、車の群が泥と雪をはねとばして走っていた。ひとは毛皮の外套をまとい、毛皮の帽子をかぶって、傘をささずに濡れた街路を歩いていた。肩や胸に降りかかる雪が、溶けて、したたっている、気にする様子はなく、陰鬱な空の下で、各自が、己の外皮にくるまって歩いているという、そういう存在感のようなものをおぼえさせた。人々にまじって、こちらもなにくわぬ顔でいっしょに歩いた。春の気配のしはじめた日本から、突然、冬景色のヨーロッパの都市に舞いもどっていたのだった。

気温は最初の日ほどではなくなっていたが、どんよりと、時に薄日のさすだけの寒い日が続いて、やっと半月を過ぎた頃に晴れの日を一日迎えた。

たしかにここウィーンに舞いもどってきたという感じで、一か月半の滞在は始まっていた。十年前に、二年間この都市に住んだときは、ウィーン北部の、窓からウィーンの森の丘陵を間近に見渡せる位置に住居を借り、市電で二十分ほどかけて、市の中心部にある大学に通ったものだが、今度は、市の中心部、つまり第一区に住むことになったのである。そこは19世紀の終りまでは城壁と壕に囲まれていたウィーン旧市街であり、住居は、狭い露地を行った所のアパートの六階にあった。しかし建物の片側はドナウ・カナールに面しているので、窓からの視界は開けており、それでよく外を眺めていた。部屋は狭く、机が窓際にあるから、いつも同じ景色を眺めていた。旅行者の日常であるから、諸道具も、しごく簡単で、単調な日々が進行していった。単調さのなかで、ウィーンの空気を深々と吸

う。

そのように深々と呼吸するこの地の空気が、ただ安堵を与えてくれるだけのものではないことを私も感じていた。華やかな過去の名残をいまなお留めるこの古都が内に含むのは挫折と没落の歴史である。殊に19世紀末よりは独得の文化的繊細さが示されると同時に、政治的領域では、現代のもつ暴力的側面が、荒々しく鬱屈せる古い都を舞台に渦巻き、やがてこの国は、ナチス・ドイツによる支配をむかえた。そのような過去はこの都市の石壁に囲まれた闇に沈んでいったが、それはいつかまた甦りうるものであり、今回の大統領選挙もそうであった。しかも、これまでは被害者オーストリアの立場がたよく意識されていたのが、加害者としての過去が問題となっている。——「かつて生じたすべてのものが、いぜんとしてそこにある。なにひとつ片づけられてしまうことはない……すべては彼をとりまいて、じっと待ちうけている。」1915年、ホーフマンスタールは、このような独得の「絶えざる現存」をオーストリア的な場として強調したのだった。

日常は、漠たる表情をたたえて進行していた。

ウィーン的日常の吐息の一つとして、ある初老の男が、底のほうから深い溜め息をつくの、興味深くまた懐かしい気持ちで見つめる。

陰鬱な日々のある日、老女がわずかな天候の変化に胸のあたりを押さえながら、お心臓がと言う、その表情と仕様に、物憂げな大きな身体の内部にひそむ繊細な感受性と、なにかを耐えている姿を読みとる。ウィーンの風にあたって、私も、天候にたいしていくぶん敏感になっていた。三月の風は、やはり真冬のそれよりは穏やかではあったが、天候に注意するようになり、自分自身が敏感になることで、ウィーンの空気のなにかを、ふたたび感じるようになっていたと言えよう。それは、全体としては何事もない日々のなかにひそかに堆積していくもので、無意識のうちに心を

圧していくのではないかと思われた。

曇り空は灰色を全体に広げながら部分においては微妙に変わっていたのであるが、時に雲が切れ、晴れ間がかすかに見え出したとき、運河沿いに北のほうを眺めると、ウィーンの森、カーレンベルクの丘陵がくっきりと姿を現している。ああ、われわれはかつてあの付近に住んでいたのだと思う。しかし、住んでいたのは別の自分たちであるようにも思われる。それを運河の方からいま眺めていた。丘陵の黒い影を背景に、十歳若い一家が、孤独な光の輪のなかに浮かび上がってくる。

遠方の景色が眼前に現れる時間は短い。ふたたび窓の枠のなかは、けぶったような物憂い運河の風景に満たされている。

その対岸のくすんだ灰色の建物の六階の窓に、たいていはお屋近く、白い頭が二つ見えた。鳩の群がそのまわりを飛び回っている。毎日、老人が二人、窓から首を出して、鳩に餌をやっていた。また、われわれのアパートからわずか二百米ほど行った所の運河沿いには、1945年までゲシュタポ本部の建物があって、いまは犠牲者のための石の記念碑がひっそりと立っている。茫漠たる雰囲気に覆われたドナウ・カナル風景のなかで、ただ一つ激しい動きとして、やがて春が来れば北へ帰っていく鳩の群れが上を下へと入り乱れて、あるときは狂ったように舞っていた。鳥の乱舞の下で、まんまるく厚着した男や女が、鞆や袋のようなものを下げて、じっと市電の停留所に立っているのが見える。ひどく懐かしい光景であった。橋の上には、黒っぽい人影が二つ三つ見える。歩いているのか立ち留まっているのか。すべて乳白色の静止の雰囲気につつまれていたのである。

#### ——露地を歩いていく——

一枚の絵。シュテファン大聖堂を望みつつウィーン第一区の建物の屋根が並んでいる。しかし屋根の下に建物の姿はない。なにかどろどろしたものが下のほうから、地下から、無数に伸びてきて、そのままグロテスクに固まって、柱のようにそれがウィーンの屋根屋根を支えている、あるいは押し上げている。そういう不気味なウィーン中心部の風景が、1923年ウィーンに生まれた画家クルト・レグシエックによって描かれてい

る。『迷宮の魔術師たち』のなかで、種村季弘氏は、「ある死都の享楽家」の表題のもとにレグシエックの絵について次のように書いている。「整然と幾何学的に組立てられた都市の表層（屋根）は、形のない内部から、どろどろした生き物のような繁殖する鐘乳石にたえず押し上げられているかのようでもあり、また不安な内部がしだいに侵蝕されて空洞化したために、崩壊寸前の危機にさらされているようにも見える」と。

表層と深層、整然とした秩序と混沌。対立し合うものは、しかしここでは、深層・混沌の優勢のなかで凝固し、静止しているように見える。いまやせり出した深層のその上に、ウィーンの屋根屋根がいぜん取り澄ました顔つきで、何事もないかのごとくのっかっているのだ。圧倒的にグロテスクな姿を呈して静止しているもののその中身は何であるのか。「1918年帝国崩壊以後、闇に葬られ、葬られたがゆえに闇と同化して、表面の白日下にふたたび跳り出ようと窺っている、無意識としての過去」(種村)である。日々目にするのはそうした過去を蔵したウィーン一区のたたずまいである。レグシエックの絵はその「都市の内臓のむき出しになった風景」である。種村氏の書物のなかのその絵を見ながら、第一区の地図を広げ、迷路のごとき露地を辿り、自分の足取りを思い起こす。

道をシュテファン大聖堂へとって露地へ入った。かつてギリシャ人の商人たちが住んでいたことからその名がついているグリーヒェンガッセの露地の黒ずんだ石壁に、へばりつくようにして古い雪が残っていて、その汚れた白の上に黒く、いくつか、犬の新しい糞がころがっていた。踏みつけないように、滑らないように注意しながら、石畳を歩いて、狭い露地からフライシュマルクトに出て、ギリシャ正教の教会の前に立った。

ユーデンガッセからポストガッセを結ぶこのフライシュマルクト（肉市場）は、その通りの名が示すように、13世紀から食肉市場や食肉業者の店のある所として知られ、ウィーンで最も古い通りの一つで、また1848年には一時バリケード通りとも呼ばれたこともあり、今では肉屋、パン屋、たばこ屋等々の店が並ぶ。この通りをローテントゥルムシュトラッセへ曲がると人通りが多いが、ポストガッセへむかう。そしてシェーンラテルンガッセに入ると、人の姿は見えない。角の外壁の傷みのひどいイエズイテンガッセの、特別

狭い露地を抜けると、そこは、14世紀後半ルドルフ4世の大学創設趣意書をもってその歴史を開始した旧大学の一角で、大学教会脇の石壁に Alte Universität の字を刻んだプレートが張ってある。1848年の革命で主役を果たした大学の、重く汚れた石の建造物に囲まれた狭い長方形の広場に、人影はない。迷路に開けた空洞であった。薄汚れた灰色の、いかにも部厚い石壁ののっぺりした表面は、夢のなかに時折出現し胸を重く圧する巨大で無表情な塊をふいと感じさせもした。

だがこの古さを直接表す壁の傷や汚れももうすこしで消えていくのであろう。というも、旧大学全体の修復が計画されていて、あのおそろしく汚いイエズイーターガッセの石壁の一部が、すでに黄色に塗られて、そこがいやにげげげげしているからである。

ふたたびでこぼこの石畳を歩いて、ゾンネンフェルスガッセ、ベッカーガッセ、ヴォルツァイレをそれぞれに結んでいく短い露地から露地、さらにまた露地を曲がりくねって進み、固く窓を閉ざして沈黙している建物と建物の間を歩きながら、曲がり角で新たに開ける風景、といってももしかした別のガッセの風景だが、その部厚い石壁の重さ、崩れ方、黒ずみ方、石畳のへこみぐあいを目に留め、記憶したいと思う。そういう直接的な知覚の限界を一方で感じながら、しかし、いまのこの姿を目に焼きつけること以外のことはすまいと思いつつ歩くうちに、ついに、シュテファン大聖堂の裏側に出る。

大聖堂前の広場(シュテファンズプラッツ)の地下は、十年前にはまだ地下鉄工事をしていた。

いつ頃できるのでしょうか、と尋ねると、さあ、今世紀のうちにはできるでしょうねと、ウィーン的ゼルプスト・イロニーをもって答えてくれたのを覚えているが、ウィーン事典によると、そもそもウィーンの地下鉄の計画は19世紀後半に遡るといふ。「トンネル鉄道」とも言われたこの計画は途中で中断はしたが、ウィーンの地下に近代化の手が入りはじめたのもその頃のことということになる。地下鉄が完成し、いまは広場らしくなり、人々が三々五々かたまると、ルドルフ・アルト(1812-1905)の描くシュテファンズプラッツ風景を思い起こさせる。だがこの広場の過去をすこし遡れば、大聖堂の周囲は、18世紀半ば近くまでは墓地になっていて、地下は共同墓地として使用されていた。この地下墓地は、1783年にヨーゼフ2世のもとで閉鎖されたが、19世紀半ば過ぎまでその状態で残っていた。

不気味な地下の死の世界の様子は、シュティフターが「ウィーンとウィーン人」(1844)に書いている。地中には幾重にも通路が掘られ、小さい死体置場が作られ、そこが一杯になるとさらに掘り進んで、そのような穴はシュテファンズプラッツの周囲に立ち並ぶ家々の地下にまで達していたという。やはり19世紀後半のウィーン都市計画の一環なのか、地下墓地は撤去され封鎖されて、いまは、カタコンベのごく一部がきれいに整理されて観光用に提供されている。第一区には、このような古い地下墓地はミヒャエル教会などにいまも残っているし、さらに17世紀以後ハプスブルク家歴代の棺を納めるカプチン教会地下の皇帝墳墓を挙げなければならないが、そうしたウィーンの地下墓地といわば背中合わせに、ウィーンの地下酒蔵がある。すなわち、死の世界と生の享楽の場との、地下におけるウィーン独得の並存の姿がそこに見られるわけで、これについては先の「ウィーン断章」ですでに書いた。

しかしクルト・レグシュクの描く、もう一つ別の絵は、風化した、むき出しのシュテファン大聖堂の地下を表している。それはもはや地下ではない。侵蝕はなほだしく、いまやかろうじて山の形をとどめているものの頂きに、大聖堂は、ぼつんと立っていて、聖堂の石壁の下の部分では、風化に侵されている所も見える。かつては山の一部分であったが、山が崩れて、すでに円錐形に分離したものがいくつもつつ立っていて、乾いた砂がその周囲を埋めている。死と闇の世界をはらむウィーンの地下の、もう一方の荒涼たる崩壊の風景である。この1977年作の精密なミッシュテクニクの絵には、当時の地下鉄工事に用いたらしいものも描かれていて、下へ通じる簡単な階段もそこにある。しかし、階段を降りても、あのウィーンの地下には達しない。風化した岩の一つへ移り行くのみである。

シュテファンズプラッツからグラーベンを歩き、ケーグラーガッセを通り抜け、フライングからショットントアへ至る。リングシュトラッセ(旧市街を取り囲む環状道路)の向こう側に、現在のウィーン大学の建物が見える。こう書いてくると、今回の滞在中の行動範囲のほとんどを述べたことになる。つまり、自宅・大学・本屋・劇場・カフェ・ケラーのある、半径1.5キロの円のなかを私は動いていたのであった。

そして夜、芝居の帰りなど、ふたたび細い露地を歩

いた。一区に若者が増えて、夜おそくまでカフェにたむろして、テーブルをはさんでひそひそ話している様子が窓を通してみえる。時折、前方を人影が横切るのを見ながら、ぼんやり光っている石畳を歩いていた。  
(続く)

〔注〕 1975～1977年のウィーン滞在をもとに「ウィーン断章」を、横浜国立大学経済経営学会『エコノミア』第64号(1979)、第65号(1979)、第68号(1980)に連載した。

〔ふじい ただし 横浜国立大学経営学部教授〕